

【論文】

# 「文芸共和国」の分断

学問の共同体における制度と個人

フランチェスコ・カンパニョーラ

---

---

周知のように、近世のヨーロッパが経験した学問の変革については、今日までにさまざまな観点から研究が行われてきた。中世と近代の概念的な関わり、科学革命の重要性、教育と宗教の分離、世俗化の進展といったテーマにかんし、すでに多くの論考が存在する。20世紀初葉以降、そしてとりわけ戦後から、かかる新たな学問の発展を引き起こした歴史的条件にたいし、関心が高まってきたのである。近年の研究の多くは、よりマイナーな著作や、より無名の著者にかんし、一層の情報を私たちに提供してくれている。それらの成果として特に興味深いのは、いわゆる「文芸共和国」(République des Lettres)の広がり、重要性が、徐々に明らかにされてきたことである。本論では、そうした文芸共和国の性質について論じた上で、その分断がいかんにして起こったのかを検討する。つまり、ゆるやかな結びつきの包摂的で国家を超えた共同体としての知的世界が、いったいどのような経緯をとおして、閉鎖的で透明な制度システムに変化していったのか、以下に論述を試みることにする。

.....

※ 本論を日本語で執筆するにあたって、栗原俊秀氏にご助力いただいた。また、専門用語の日本語による表現については、岡本源太氏に助言を仰いだ。ここに感謝の意を表したい。

## 1

17世紀後半から18世紀末葉にいたるまで、ヨーロッパの近代文化の中心となった学者集団は、自身らの形成する知的共同体を「文芸共和国」の名で呼んでいた。「レスプブリカ・リッテラリア」(Respublica litteraria)というラテン語表現は、まず15世紀のイタリアに現われ、やがてエラスムス(Desiderius Erasmus, 1469-1536)によって、時代を超越する文学的伝統を蛮族集団のそれと区別するために用いられるようになる。さらに時代が下ると、文芸共和国は、自らに固有の実践と規範を備えた共同体として形成されてゆく。とりわけ16世紀以降、この共和国は、知識層にとっての理想的な統一体になった。自らをその共同体の市民として認識し、他者からもそのように見なされることは、具体的な帰属意識や明白なアイデンティティを生み出したのである。文芸共和国の黄金時代は、近代の著名な学術雑誌の数々が出版され始める時期にほかならない。たとえば、共和国の最盛期をとおして刊行のつづいた *Journal des Sçavans* は、*Philosophical Transactions* とならんで、もっとも歴史の古い学術雑誌と見なすことができるだろう。その紙面上には、*République des Lettres* というフランス語の言い回しが随所に認められる。しかし、正確を期するならば、*Journal des Sçavans* より約20年遅く刊行が始まる、ピエール・ベール(Pierre Bayle, 1647-1706)の *Nouvelles de la République des Lettres*こそが、文芸共和国という概念の内実と重要性を定義したといえる。

文芸共和国とは、Paul Dibonの言葉を借りるならば、「時間および空間の限界を持たない」超国家的な共同体である。それは国境による制限を受けることなしに、ロシアからポルトガル、アメリカ大陸の植民地にいたるまでの、世界中の土地の知識人たちを結びつける場であった。加えて、かかる共和国の一員であることは、幾世代にもわたって広がる知識人層の歴史のなかに、自らの立ち位置を持っているという意味でもあった。したがって、18世紀におけるさまざまな学術的著作、とりわけ *Histoire des Ouvrages des Sçavans* のような雑誌は、すでにその題名自体が、学問の世界の歴史的な連続性を示している場合が多いのである。

とはいえ、文芸共和国の内部に根本的な差異が存在したことは明らかであり、それらはしばしば、政治的または宗教的な文脈において、露骨な衝突を引き起こした。第一に、文芸共和国の学者たちは、三つの異なるグループに分かれていた。カトリック、プロテスタント、そして自由思想家である。しかし、この三つのグループを隔てる境界は、必ずしも明白ではなかった。むしろそれらは学派、宗派、党派の分裂によって、なおいっそう錯綜とした状況を呈していたのである。とはいえ、カトリックとプロテスタントの差異は誰の目から見ても明らかであり、それはライプニッツ(Wilhelm Gottfried Leibniz, 1646-1716)のような、宗派間の対話を促すべく尽力していた学者たちもまた、はっきりと認めざるをえなかった。

国民国家の黎明期にあたる当時の世界では、学者の出自もまた重要な役割を担っていた。国民国家という制度は、教養人の形成につねに影響を及ぼしつつけた。ナショナリズムの萌芽とも呼ぶべきものが生まれたのは、まさしくこの時代であると指摘する声もある。とはいえ、少なくとも1750年頃までは、学者の宗教的信条や政治的理想は、出身国家のものよりもむしろ、滞在先の国家における標準と一致することの方が、明らかに多かった。たとえば、ルイ十四世によってナントの勅令が廃止されて以降（1685年）、フランスから逃れてきた多数のユグノー教徒にとって第二の祖国となったオランダは、18世紀をとおして自由思想家を惹きつけ、異端者や国教反対者に安全な避難所を提供しつつけた。一方で、太陽王のフランスはというと、イエズス会士の知的活動を保証し、彼らの敵対者であるジャンセニストにたいしては迫害を加えた。

英国領では、著作物の大部分はロンドンで刊行された。英国に起源を持つ、大陸とは異なった政治秩序の見方は、そのほかの理論とともに、18世紀後半のヨーロッパ大陸、とりわけ啓蒙主義下のフランスに普及していく。

したがって、各々の地理的・政治的な領域は、それぞれに固有の文化的・言語的特徴を示していた。それと並行して、言語の差異——それは必ずしも国境や、学者たちの滞在先と合致するわけではない——は、学識ある人びとのあいだにもう一つの区別をもたらしていた。17世紀後半から、ラテン語に代わり各国語が学術著作の共通言語になると、こうした言語上の差異の重要性はたいへんに高まった。数々の近代語のなかでも、とりわけフランス語は広範に普及し、異なる国家の学者たちのあいだの主要なコミュニケーション手段として認められたのである。

## 2

---

しかし、文芸共和国は、今日でいうところの普遍的かつ国際的な共同体であったわけではない。共同体を、外部の異なる文化的世界と分かつ境界は、存在していたのである。そうした境界を把握することは思いのほか困難であるとはいえ、この共同体が、キリスト教の伝統に所属する成員によって成り立っていたということは、ほぼ確実であるといえるだろう。この「キリスト教の伝統」とは、ヨーロッパのキリスト教思想からは分離しつつも、やはりそこに自身の根がある、理神論や無神論などの伝統をも含んでいる。しかし、文芸共同体の内部と外部を分け隔てる壁は、キリスト教徒の君主によって統治される領土の地理的な境界と、厳密に一致するのではない。事実、近世の学問にたいする主要な貢献は、世界各地の植民地に散らばっていた商人や宣教師から届けられた。たとえば、地球のいたるところから送られてくる書簡によって構成された *Lettres édifiantes et curieuses* は、外部世界にたいする近代ヨーロッパ人の集合的想像力を形づくったのである。

あるいは、近代の黎明期に書籍市場を席卷した、旅行記というジャンルにも注目すべきだろう。これらの書物は、医学、地理学、歴史学、哲学といった、あらゆる知の領域に影響をおよぼした。さらに加えて、近世におけるオリエンタリズムの文化的・社会的形成にかんする近年の研究は\*<sup>1</sup>、非ヨーロッパ世界に出自を持つ学者たちが、当時のヨーロッパ内にも存在していたことを明らかにした。こうした学者たちは、ヨーロッパ人ではないにせよ、キリスト教徒ではあった。ヨーロッパのそれとは異なるキリスト教の伝統に属していた、マロン派のエチオピア人 Hanna や、ヨーロッパに赴く以前に改宗した中国人の沈福宗 (Michaelis Alphonsus Shen Fu-Tsung, ?-1691) などが、その例である。

当然のことながら、ヨーロッパの言語で書く術を知らず、別の学問的伝統に属していた多くの学者は、文芸共和国の外部に留まっていた。もともとは、エラスムスの例において明らかであるように、空間的・文化的な周縁の外側に存在するあらゆるものを象徴する蛮族の世界を、学問の共同体から截然と区別することが、*Respublica litteraria* という表現の目的であった。ところが、旅行者や宣教師による物語を介して、アジアの多面的な文化や文芸がヨーロッパ人に伝えられるにつれ、この表現の意味するところも変化してきた。

共同体の外部に広がる知的文化の排除が、文芸共和国のアイデンティティを定義する上で決定的な要素となったことは間違いない。ただし、そうした除外は、信仰よりもむしろ実践上の理由によるものが大部分であったから、キリスト教徒であることが共和国に参加するための必須の条件であったと捉えることは誤りであろう。しかし、この実践的な制限——すなわち、文化的・言語的に分け隔てられた世界に生きることに起因するコミュニケーション上の限界——は、何らかの基点を中心とする、無定形でも偏在的でもない共同体を形成することに、はっきりと貢献した。とはいえ、同時にこの共同体は、ウラル山脈からイベリア半島、アメリカ大陸の植民地にいたるまでの、広大な領域を内包してもいたのだった。

いかに曖昧で、かつ、浸透性を孕んだものであろうとも、境界そのものの存在は、他者にあてがった立場から逆照射して自己を定義することを可能にした。

ところで、先に言及した排除の根拠とは、実践的であるとはいえども、偶然に基づくものではなかった。形式化された人間関係の綱の目や、書簡のやり取りの習慣に基礎を置く共同体にとっては、言語の障壁はもちろんのこと、習慣の差異もまた、乗り越えがたい問題であったことは明らかである。

鏡としての他者、つまり、差異の内部の比較項としての他者は、おもに非ヨーロッパの知識人であった。しかし、文芸共和国の外部には、それとはまた別の人々も存在していた。

近代において、長らく主題として前景化されないままであった、もう一つの重要な区分が存在する。すなわち、科学や文化に興味を持たない人間——とりわけ社会階層の下部に

.....  
\* 1 Nicholas Dew, *Orientalism in Louis XIV's France* (Oxford, 2009)

位置する人々——と、学者とを分ける境界である。Anne Goldgar が指摘するように、近世の学者たちにはまるで階級意識など存在していなかったかに思える。それでもなお、近代のあらゆる歴史的資料は、学識ある人々と、彼らとは異なる社会的バックグラウンドを背景に持つ人々のあいだの、根本的な分断を示している。

もちろん、正式な教育を受けず、職人の家系に出自を持つイギリスの理神論者チャップ(Thomas Chubb, 1679-1747)のような、二つの世界のあわいに生きる例外的な人物は存在した。しかし、文芸共和国のメンバーの大部分は、裕福な家柄の出であるか、あるいは——より頻繁なケースとしては——教会関係者であった。さらに、聖職者としてのキャリアの可能性が閉ざされていた一群の人々(たとえば、オランダやイギリスで旺盛な活動を展開していた自由思想家たち)は、トーランド(John Toland 1669-1722)のように有力な後援者の庇護にすぎたり、あるいは、マルシャン(Prosper Marchand 1678-1756)やデメソー(Pierre Desmaiseaux 1666-1745)のように、出版業をとおして生計を立てたりした。このような文化的・社会的な限定性は、文芸共和国のメンバーにたいし、彼らの共同体の特徴である形態上の一体感を附与していた。

したがって文芸共和国が備える性格とは、同時期のヨーロッパに見られた他の社会関係から自身を区別するという、消極的な仕方によっても定義されたのである。文芸共和国——あるいは、より正確を期すならば、その構成員たち——は明らかに、外部との関係を保持していた。たとえばある種の知は、国家や、その認可を授かった組織によって、実践的道具として用いられ、権力の行使のための思想上の基盤を与えたりすることが可能であったから、航海術の進歩や地図作成にかんする新発見は、国富の増大、および、商業や航海の発展に有益な道具として、出版社や書店によって大いに喧伝されたのである\*<sup>2</sup>。

さらには、フランスをはじめとするいくつかの国では、国家機関が学者にさまざまな援

.....  
\*<sup>2</sup> 例えば Frédéric Bernard (ed.), *Recueilles des Voyage au Nord contenant divers Mémoires très utiles au commerce et à la navigation*, (Amsterdam, 1715-18) や *Planisphere general; pour servir à l'Intelligence de la navigation et du Commerce des Europeens* (Genève, 1780) などを参照。だが、この種の「コマーシャルリズムにもとづく自己PR戦略」は、一般的に言えば、社会に対する近代的知識人の特徴と呼べるのではないだろうか。とは言え、学者のあいだにも、学問をめぐるこうした現実には、懐疑が存在した。たとえば、1737年7月、*Mémoires de Trévoux*, Disseratation sur la célèbre terre de Kamtschatka et sur celle de Yeço: sur l'étendue de la domination Moscovite & Chinoise: & sur la communication ou non communication des continens de l'Asie & de l'Amerique: & le passage dans les Mers de l'Orient par les Mers du Nord. Par le P. Castel J という論文が刊行された。その中で著者は以下のように述べている。

«Voilà pourquoi je regarde le passage qu'on cherche au nord pour aller commercer au Japon, à la Chine, ou en Amerique, à peu près comme le grand œuvre des Philosophes. Ce grand œuvre est infaisable, mais en le cherchant, la Chymie et la Physique se perfectionnent toujours. En cherchant le passage en question, la Géographie s'est beaucoup perfectionnée, & la navigation aussi si l'on veut. Mais je doute qu'aucune sorte de Commerce puisse jamais s'en prévaloir»(1717)。

助を与えるようになった。そうした傾向から生まれた主要な成果が、ヨーロッパで最初となる科学アカデミーの創設である。

共同体としての文芸共和国が、固有の関心、社会的実践、社会的慣習を備えていたことは、強調せねばならない。近世の政治状況において、権力構造にたいし集団として直接に働きかけようとする志向が学者のあいだに生じるには——つまり、学者が近代的意味での「知識人」(Intellectuel)となるには——少なくとも18世紀後半まで待たなければならなかった\*<sup>3</sup>。いずれにせよ、共同体全体から、自己の内在的目的として見なされているいくつかの主題があった。その例としては、第一に、学問の進歩が挙げられる。この「学問」の内実がいかなるものであったかについては、大いに議論の余地のあるところだが、知識の蓄積と流通に、とくに力点が置かれていたことは確かである。知識をめぐる現代社会の状況——それは「知識の市場」とでも呼ぶべきものだが——とは異なり、近世においては、知にたいする批判的解釈よりもむしろ、知の獲得それ自体が重要視されていた。というのも、世界が新しい統一体として姿を現わすようになってから、まだほんのわずかな時間しか経っておらず、いまだ見られたことも、経験されたこともないような事物が、そこにはいくらでも残されていたからである。学者たちにとって、その未だ知られざる場所は、神秘を孕む宝箱のようなものであった。その宝箱は、分類体系の学の対象物となることを、時や遅しと待ち構えているところだったのである。

この「学問の進歩」という目標は、文芸共和国に、積極的な自己規定を促すことになった。つまり、構成員一人一人が、それぞれの共有するイメージのもとに団結し、闘争を展開していく共同体として、文芸共和国を成り立たせるべく働きかけたのである。

かくのごとく、友情と敵意のあいだ、複数のイデオロギー的な対立のあいだで揺れながらも、外的世界から自己を区別し、自己規定を実現させる規則や指標を、文芸共和国は備えていた。それでもなお、ここで想起しておくべきは、文芸共和国にとって他者とはつねに、相対的な存在だったということである。というのも、この共同体には元来、外部の存在を自己に包摂しようとする傾向が備わっていたからである。事実、共同体のメンバーにとっての主要な任務の一つは、書簡の網に招き入れるべき新たな学者を見つけ出すことであり、こうした活動が、文芸共和国のより創造的で活動的な側面を特徴づけていた\*<sup>4</sup>。こうした拡張的傾向は、理論的な観点からすれば、「礼節」(politesse)以外にいかなる制限も持たなかった。

.....  
\*<sup>3</sup> ただし、「intellectuel」という言葉が生まれたのは、19世紀後半のドレフュス事件の後である。

\*<sup>4</sup> Dena Goodman, *The Republic of Letters: A Cultural History of the French Enlightenment* (Ithaca, NY, 1994), p. 17

### 3

こうした特徴的な性格、すなわち、文芸共和国の包摂的傾向にかんしては、のちにあらためて検討し、現代世界の知識人たちが組織する国際的な共同体への参入と比較して、文芸共和国への参加はどのような形で機能していたのかについて、より明確な定義を試みる予定である。文芸共和国が新しい構成員をどのように迎え入れていたのかについて論じるより前に、共同体内部の学者たちがいかなる関係を築いていたのか、確認しなければならない。

何よりもまず、学術雑誌や印刷刊行物が、初期のアカデミーと同様に、文芸共和国の歴史にかんするもっとも重要な証言を提供していることは間違いない。とはいえ、文芸共和国への学者たちの参入システムがいかに機能していたのかについて理解するためには、書簡をこそ参照すべきである。

文芸共和国の公的側面（印刷されたテキスト）や制度的側面（大学や、時代が下るごとに重要性を増してゆくアカデミー）は、この共同体にとって、氷山の一角に過ぎなかったといえるだろう。学者たちの活動の大部分は、私的な、あるいは半・私的な関係性のもとで展開した<sup>\*5</sup>。つまり、文化的交流や人的往来の多くは、個人の邸宅や閉鎖的なサークルにおいて行われていたのである。いわゆる「サロン」は近世をとおして、文化的・政治的な討論の場として、重要な役割を演じた。この意味では、自由思想家のグループによってオランダで結成され、秘密裡に大陸全土へと拡大していったフリーメーソンのような結社も、サロンと同様な機能を担っていた。

つまり、文芸共和国の活動の大半は、非制度的な形式のもとで、言い換えれば、国家権力により設定された枠組みの外で行われていたということである。確たる官僚制度を備えた国民国家の力添えによって十九世紀に隆盛をきわめる国立アカデミーですら、多くの場合は、君主の意図というよりはむしろ、組織化を目指す研究者たちの努力によって生まれたのである。

アカデミー・フランセーズや、あるいは（より限定的な形ではあれ）ベルリン・アカデミーは、その設立当初から国家によるコントロールを受けていた。しかし、最も古い国立アカデミーである「自然について知識を改善するためのロンドン王立協会」（一般には、ロイヤル・ソサエティの名で知られる）にかんしては、事情が異なる。1663年、英国の

.....  
\*5 近代における人間関係のシステムは、公私の区別という点にかんして、今日とは異なる文化的表象を示していた。それにもかかわらず、「比較的近い知人／他者」という、近代における特殊な区別は、現代においても理解できる。文芸共和国は、現代の知的共同体と較べ、科学の進歩のために個人のあいだの人的交流を積極的に評価していた。こうした「知人」関係は、互いの果たすべき義務に基盤を置いていた。

学者たちの私的な会合から派生したロイヤル・ソサエティは、発足当初から王の庇護を受けていたとはいえ、国家権威による直接の影響下にあったわけではなかった\*6。

自然科学に関心のある研究者集団、すなわち科学アカデミーは、イタリアにその起源を持つ。トスカーナのレオポルド大公の治下、ガリレオの弟子たちによって設立された著名な「アカデミア・デル・チメント（実験分析のアカデミー）」は、君主から直接に財政的な援助を受けていた。しかし、「チメント」よりも先立って、1603年にローマで生まれた「アカデミア・デイ・リンチェイ（オオヤマネコのアカデミー）」は、教皇権力とはまったく関わりがなかった。さらに時間をさかのぼり、「リンチェイ」の前身を突きとめようとするならば、1560年にデッラ・ポルタによってナポリに設立され、やがて異端審問にかけられることとなる、「アカデミア・デイ・セグレーティ（秘密のアカデミー）」の名を挙げることができる。このアカデミーの会合は、デッラ・ポルタの私邸にて開かれていた。

この種の私的な集まりに参加する方法は、現代における学会への参入と比較するなら、非形式的なものであった。当該団体の構成員から広く知られ尊敬を集めている学者から紹介を受けた人物であるならば、たいていの結社は快く迎え入れた。

文芸共和国の内部における人間関係の、かくも顕著な私的性質があったからこそ、この共同体は往々にして、外部の権威によるコントロールに対抗することができたのである。というのも、公的な組織として権威にたいし歯向かうということを、文芸共和国は目指さなかったからである。文芸共和国はあくまで、何がしかの倫理を構成員たちと共有する君主に導かれた、人間関係のネットワークでありつづけた。「オネットム」(honnête homme、宮廷の廷臣のごとく礼節をわきまえた人物)の「礼節」(politesse)を、キケローの『義務について』や『友情について』、あるいはセネカの『閑暇について』のような古典へと結び合わせる長い伝統のうちに、文芸共和国における人間関係は根を張っていた\*7。それゆえ、文芸共和国の活動は、社会的・政治的な事業に取り組む際や、権威の側から抑圧と非難を受けた際にも、国家にたいする反乱へと発展することはなく、私的領域のうちに留まりつづけた。もちろん、共同体の構成員の中に、公的な立場にある人物がいなかったわけではない。しかし、彼らにとって、職務と知的活動とは、それぞれ独立した営みだったのである。

\*6 この意味で、フランスにおけるいくつかの小さな科学アカデミーは、パリのアカデミ・デ・フランスとは異なり、ロイヤル・ソサエティに似ていた。ロイヤル・ソサエティの秘書と Philosophical Transactions の編集者 Henry Holdenburg が参加したボルドーの科学学会が、その一例である。

\*7 «Le statut essentiellement privé, volontaire et autofinancé de la Respublica literaria a conféré à ses travaux, à sa coopération interne et à ses débats une vitalité, un pouvoir d'attraction, une capacité d'adaptation aux circonstances, une indépendance et résistance aux censures que ne pouvaient offrir ni les anciennes Universités ni même les nouvelles Académies royales». Marc Fumaroli, "The Republic of Letters," *Diogenes*, 143 (1988).

## 4

---

したがって、文芸共和国とはあたかも、現実の人々が共有している空間の外部に、言い換えれば、存在の別の次元に自らの居場所を定めているかのようであり、そうであるからこそ、共同体の自律性を維持することができたといえる。そこでは、自己の規範を自ら設定し、自己の価値基準にもとづく仕方で議論を行うことが可能になる。議論を交わすための共通の規範とは、共生するための規範にほかならず、まさしくこうした規範が、文芸共和国を結合力の強い共同体として成り立たせた。礼節 (*politesse*) を放棄することは、文芸共和国の構成員にとって、けっして超えてはならない一線であった。自由思想家とも急進主義者とも遠く隔たるモリニュー (William Molyneux, 1659-1698) は、ジョン・ロックに宛てた書簡のなかで、トーランドの『秘儀なきキリスト教 (*Christianity not Mysterious*)』を批判したブラウン (Peter Browne, 1665-1735) にたいし、敵愾心を隠さなかった。モリニューの反発は必ずしも、ブラウンの批評の苛烈さに起因するものではなかった。それよりも、文芸共和国で共有されている規範に反して、ブラウンが政治的権力にたいしトーランドを罰するように訴えたことに、モリニューは怒りを覚えたのである。敵対する知識人の議論がいかなる過誤を含んでいようとも、外部から政治権力の検閲を招き入れることは、文芸共和国に帰属する学者として、倫理的に受け入れがたい行為であった。

反対に、1745年から1762年まで *Mémoires pour l'histoire des sciences et des beaux-arts* 誌の編集長を務めたイエズス会士のベルティーエ (Guillaume-François Berthier, 1704-1782) は、共同体の模範として見なされていた。この人物は、いかなる著作を書評する際にも、そこで表現されている思想や、自らの立場とは遠く隔たる作者にたいし、敬意をもって振る舞うために、「オネットム」 (*honnête homme*) の鑑として称賛されていたのである。

こうした理想はしばしば裏切られたが、それにもかかわらず、学者たちは自身を文芸共和国の構成員であると強く認識していた。かような自覚があったればこそ、*Augmentus scientiarum* (学問の進歩) という共通の目標に向かって、一丸となって協働できたのである。このような意味で、学問の蓄積が目指すべき方向をコントロールすべくさまざまな党派が闘争を繰り広げたとしても、一人一人の学者の貢献は、文芸共和国の主要な目的にとって、疑いようもなく大いに歓迎すべきものであった。その目的とはつまり、知識を集積し、それを流通させることである。

文芸共和国の活動が支障なく機能するためには、まず第一に、構成員同士を有機的に結びつける関係性の網の目が必要であった。共和国のメンバーたちは、互いの知己を得たのちは、他の構成員にたいしてある種の義務を負うことになる。たとえば、ソワッソンの

司教であり、*Traité philosophique de la faiblesse de l'esprit humain* や *Traité de l'origine des romans* などの著作を残したユエ (Pierre-Daniel Huet, 1630-1721) は、オランダのユグノー教徒であるモラン (Étienne Morin) にたいし、フランスでは見つけれない書物を手配してくれるよう、幾度でも繰り返し書簡で依頼することができた\*<sup>8</sup>。近世の学問社会を特徴づけていた人間関係において、学問の進歩のために一致団結して働くという、メンバーの共有する任務をめぐるレトリックが、構成員のあいだに繊細な調和を生み出す上で、どの程度まで有効に機能していたのか、見定めることは難しい。それでもなお文芸共和国は、多くの参加者たちにとって、自己実現を叶える場でありつづけた。協働を謳うレトリックにおいては、万人の貢献が称賛されてしかるべきであるという共通理解があるために、趣味として学問に打ちこむ人間もまた、国際的な名声を博す偉大な天才と同等の存在として見なされていた。

こうした事情があったからこそ、アルプスの小さな村落に暮らす若く無名の助任司祭が、ゲルマン民族の大移動にかんする考古学的証拠を発見することができたし、長崎の出島に短期滞在したオランダ東インド会社の医者は、ヨーロッパでは知られていない針治療のような新しい治療法を伝えられたのである。無名の旅行者や言語学者によってもたらされた知見をもとに、ライプニッツは言語の起源にまつわる理論を刷新し、シュレーゲル (Karl Friederich Wilhelm Schlegel, 1772 ~ 1829) の言語学の先駆者となった。

人的交流から派生してくる成果が、個人間の団結と調和を成り立たす要素となる、そのような社会的空間が、この共同体の理想であった。文芸共和国の英雄ピエール・ベールは、敵意と対立を乗り越えていこうとする希求を、次のように表明している。

ここで問題となるのは、決して宗教ではなく、学問である。それゆえ、人間を別々の派にわける項目を除外し、彼らを結びつけるものだけを考慮すべきである。それは、文芸共和国の中で名を上げている人の特質である。その意味で、全ての学者は、兄弟として、あるいは誰もが同じく善良な家系の出身としてお互いを見なければならぬ。<sup>\*<sup>9</sup></sup>

Annie Barnes の *Jean Leclerc et la République des Lettres* (1938) は、古典と呼ぶこと

.....  
\*<sup>8</sup> Anne Goldgar, *Impolite Learning - Conduct and Community in the Republic of Letters 1680-1750* (New Haven-London, 2004) p. 17

\*<sup>9</sup> "Il ne s'agit point ici de Religion, il s'agit de Science: on doit donc mettre bas tous les termes qui divisent les hommes en différentes factions, & considérer seulement le point dans lequel il se réunissent, qui est la qualité d'Homme illustré dans la République des Lettres. En ce sens-là tous les Sçavans se doivent regarder comme frères, ou comme d'aussi bonne maison les uns que les autres" Pierre Bayle, *Nouvelles de la République des Lettres* (March 1684), Préface

はためられるものの、本論が取り上げている時代のこの上なく見事な描写であり、最良のケース・スタディを提供してくれている。Barnes の指摘によれば、1680 年代から 18 世紀全体をとおしての、文芸共和国の根本的な側面の一つとして、公衆を自己のうちに組み込む能力が挙げられる。とすれば、大学のような、制度としては開放的であっても専門分野ごとに部局が細分化されている組織より、むしろサロンのような場所のほうが、専門知識を持たずとも好奇心の旺盛な公衆たちを惹きつけたのは当然の結果である。実のところ、1680 年代から 1750 年代にかけて、「オネットム」の理想に基盤を置く共同体の内部には、銜学にたいする軽蔑の念が広まっていた。もちろん、学者は自己の職務を放棄してはならない。しかし、また同時に、社会的に礼儀正しく、機知をもって行動することも必要なのである。

階級、出身地、職務上の地位、性などに応じて、学者はそれぞれに異なる義務を帯びるが、その一方で、共同体の構成員は誰であれ、最小限の「良識」(bon esprit) を備えている必要があった。これは、肉体労働に従事しない社会階層に属する人物と関係を築くためには、かならず要求される資質であった。こうした「エスプリ」をもっともよく体現していたのが、フォントネル (Bernard le Bovier de Fontenelle, 1657-1757) である。明晰な学識者であると同時に洗練された紳士でもあった彼は、およそ百年に及ぶその人生のあいだに、「偉大なる世紀」(le grand siècle) と「啓蒙時代」(les lumières) の橋渡しをした人物であった。知の世界にたいして、専門家ほどには時間を費やすことのできない紳士・淑女に向けて書かれたフォントネルの著作は、きわめて広範な読者層に迎え入れられた。新たな文化的世界が社会にどのように浸透していったかについて、フォントネルの生と著作は雄弁に物語っている。

同時に、この時代には、「機知」(wit) にたいする志向もまた、いたるところで認められた。この種の新しい文体を採用した書き手は、文化や科学の普及に努めた人物たち——たとえば、*Newtonianismo per le dame* の著者アルガロッティ (Francesco Algarotti, 1712-1764) など——に限られるわけではない。

真剣そのものであり、ユーモアのセンスの欠片もない神学者たちの著作にも、esprit や wit を表現しようとする試みを見い出すことができるのである。それはけっして、(オランダよりはむしろフランスに強く顕在した) 社交界の精神ではない。誰もが、あれやこれやの手段に頼りながら、社会のより広範な領域へと溶け込んでいこうと懸命になっていた。社会的コミュニケーションの一形態としての学問は、この時代において、拡張傾向にある勢力であった。かかる拡張が可能になった理由とは、文芸共和国が統一された形式を持っていたからであり、言葉を換えるならば、あらゆる学者が、それぞれの従事する専門分野のいかんによらず、唯一の共同体に所属していたからである。文芸共和国のこうした統一性は、おそらくは学問の統一性を生み出し、両者は互いに手を取り合って進んでいった。

人的交流からもたらされる果実として学問が発展していくためには、たえずその規模を

拡大し、新たな才能を自己の活動のうちに巻き込んでいく必要があった。そうした知の最前線を表象していたのが、文芸共和国の擁するもっとも強力な媒体であるところの、さまざまな学術雑誌であった。それらは、個人的なつながりを超え、書物の市場で売買されていたという意味では、公的な性格を持つものであるが、また同時に、特定の集団内部のコミュニケーション手段としてしばしば利用されたことを考えるならば、私的な性格を持っていてもいた\*10。一人の学者がある雑誌の編集長とコンタクトを取る場合、それは書簡の形式をとおして、あたかも知人に便りを出すかのような態で行われたのである。読者はというと、現代の論文のそれのごとくに匿名の存在ではなく、書き手や編集者から、同僚や仲間のようにして呼びかけられた。

ほかの学者たちと関係を取り結ぶ際に、排他的な振る舞いが見られないわけではなかったが、とはいえ、一般的な傾向について述べるならば、共同体の規模を縮小させようという傾向は存在しなかった\*11。共同体を全体として維持するため、さらには、一般社会とのつながりを保ちつつ、いっそうの拡大を実現するには、知を普及させる手段が必要不可欠であった。ただし、ここでいう普及とは、Barnes の言葉にあるように、「高度な普及」(haute vulgarisation) である\*12。これは、後期啓蒙時代における、大衆に知識を附与し蒙昧から救い出そうという理念とは、異なる発想である(正確を期するならば、後期啓蒙時代においても、そうした理念がつねに有効であったわけではないのだが)。新たな知が直接的な方法で政治に働きかけ、学者集団が政治の場における主人公になるような時代は、いまだ到来していなかった。市民の普遍的理想について熱心に語られるよりも前の時代にあつて、「想像的」\*13な共同体でありながら、確たる実在性をも備えていた文芸共和国は、教養人という煉瓦によって、その礎を築いていたのである。

もっとも純粋な形式における文芸共和国は、理念的には階級の差異から自由であり、イデオロギー的には宗教の相違から解き放たれていた。そこはまた、国籍すらも二次的な要素として捉えられるべき場であった。とはいえ、多くの構成員はやはり、祖国への愛を重要な感情と見なしていた。

例えば、第三代シャフツベリ伯爵(Anthony Ashley Cooper Third Earl of Shaftesbury, 1671-1713)が『特徴論(Characteristics of Men, Manners, Opinions, Times, 1711)』において——人間性への愛がより上位にくると前置きをしながらも——愛国心を徳目の一

\*10 学者たちが個人的に取り交わす書簡においては、私的スタイルと公的スタイルの混合が認められる。受取人以外の人物も手紙を読む可能性が高く、往々にして書簡が刊行されることもあったのだから、純粋に私的なスタイルを採用するには無理があった。

\*11 文芸共和国のこうした性格が、19世紀以降の大学制度の機能の仕方といかに異なるかについては、後に説明を行う。

\*12 Barnes 1938, p. 1

\*13 Benedict Anderson, *Imagined communities*, 1983.

形態と見なしていたことは、広く知られている。ところが学者たちは、国籍を根拠にしてお互いに振る舞うことを、潔しとしなかった。何よりもまず、その人間的なつながりにおいて、彼らはただ単純に、学者だったのである。共和国、君主国、独裁制、いずれの形式を採用するにせよ、国家という概念そのものは、領土と血の自然主義的な次元をその中心に据えている。一方の文芸共和国においては、その呼称自体が明快に示しているように、文学、すなわち知の精神的な次元が、国家の基盤となっていた。

## 5

---

Kasper Risbjerg Eskildsen の示唆に富む論稿によるならば\*<sup>14</sup>、学者たちの結合の在り方として、文芸共和国とは異なるモデルが 18 世紀末以降に生まれていた。かかる新しいモデルの台頭は、北ヨーロッパ（ドイツならびにスカンジナビア半島）において特に顕著であった。それは公的機関と学者たちとのあいだの直接的な関係に基盤を置き、私的サロンよりも国立大学をその中心としていた。大学教授や国家官僚によって形づくられるこうした環境では、文芸共和国の理念そのものが、厳しい批判にさらされる。文芸共和国とは、知識人たちが社会の支配を目論み、それぞれの民族に敬意を払うことなしに国際的な秩序を押しつけようとする政治的な集団であるとして、大学に勤める新しいタイプの学者はこの共同体に非難を加えたのである。

文芸共和国はまた、偉大な学者たちが、同族集団のなかで抜きん出た地位を得るために、民主主義とはまったく関係を持たない現実のうちで権力闘争に明け暮れる、極度に腐敗した場としても指弾された。要するに、文芸共和国とは、学問の寡頭制によって統治された国だというわけである。ところが、北ヨーロッパの学識者たちが構築した新しいシステムは、制度化の過程をとおして、学問の共同体の国有化をもたらさずにはいなかった。その結果、共同体はその普遍性を、またとりわけ、その自律性を喪失するにいたったのである。

文芸共和国の厳格な行動規範は——現実への適用は限定的なものであったにせよ——政治的権力による他律的な圧力から、学者たちの共同体を隔離せしめた。Daston は、このようなシステムのもとで個人間の人的交流を守るために必要な「方法」(method) を、以下のように解説している。

拮抗する解釈の間で決着をつける方法——依然として困難な問題だが——、そして、他の学者の意見を同国人、同宗教信者、友人と親戚の意見よりも重んじるように訓

---

\* <sup>14</sup> Kasper Risbjerg Eskildsen, "How Germany Left the Republic of Letters", *Journal of the History of Ideas*, Volume 65, Number 3, July 2004, pp. 421-432.

練する社会化の過程。文芸共和国によって推薦された無関心＝公平のイデオロギーは、客観性という名でも知られている社会かの過程の歴史において最も重要な第一の段階だったと言えるだろう。<sup>\* 15</sup>

ピエール・ベールの言葉によるならば、文芸共和国において、その市民権は、宗教的、政治的、国家的党派心を棚上げにし、自由な知的討論への参加を要求する。その内部では、この共同体が自律的組織であったからこそ、ヘゲモニーのために相争うさまざまな党派があった。共同体に属するあらゆるグループのあいだで、こうした力関係の綱引きが行われていた。

ところが、学者たちの共同体は、その社会的な成功がさまざまな形をとおして制度化をもたらすようになると、その本質を変化させずにはいられなかった。そうした変質は、18世紀末から19世紀の半ばにかけての、国家の統治にかんする革新的な理論の隆盛と平行して生じたものである。啓蒙専制君主から第一共和政末期にいたるまで、西ヨーロッパ諸国は絶えず中央集権の傾向を強め、学問の制度化のための政策を施行してきた。ドイツにおいて、この制度化過程を指揮した中心人物は、フンボルト（Wilhelm von Humboldt, 1767-1835）であった。フンボルトにとっての教育の目的とは、伝統的な人文主義の観点とは異なり、学問に取り組む人間を外部の社会へと統合することであった<sup>\*16</sup>。1809年から1810年にいたるまでプロイセンの文部大臣として教育制度を革新し、ドイツ全土の大学のモデルとなるベルリン大学を設立したのは、ほかならぬこの人物である。官僚の調整のもとにあるドイツの大学制度は、英国やフランスの学者が取り組んできた私的、個人的な研究に代わり、設備の整った実験室で行われる専門的な研究を助成した<sup>\*17</sup>。

フンボルトによれば、研究へと専念する新たな大学の目的は、科学的な知の追及にほかならない。一見したところ、これは文芸共和国の伝統と合致し、教育を通じて子弟たちの人格的陶冶を図る（つまりは、社会的規則を押しつけるということであるが）中世以来の古い大学にたいする、文芸共和国の勝利であるかのようにも見える。しかしながら、新しいタイプの大学における教育・研究の自由とは、外からあらかじめ規定された自由であっ

.....  
<sup>\* 15</sup> "a method of adjudicating between rival interpretations - still a vexed question - and a process of socialization that trains scientists to prize the good opinion of other scientists over that of compatriots, coreligionists, friends, or relatives. I shall argue that the ideology of detachment trumpeted by the Republic of Letters was the first and most important chapter in the history of that socialization process otherwise known as objectivity" Lorraine Daston, "The Ideal and Reality of the Republic of Letters in the Enlightenment", *Science in Context* 4, 2 (1991), P. 369

<sup>\* 16</sup> Rüegg, *A History of the University in Europe*, Vol. III, pp.17-18.

<sup>\* 17</sup> Wilhelm von Humboldt, *Gesammelte Schriften* (Berlin 1903-36) XIV, p. 155.

た。学問の体系化は、君主の勅令や国家の法律による取り決めのもと、公的な機関の内部、すなわち、国家主導のアカデミーや 19 世紀的な大学の内部において完成されたため、この時点で、学者たちの共同体の自律性は失われた。とりわけ、潜在的には無制限の国際性という、文芸共和国を特徴づけていた性格が、姿を消してしまったのである。

北ヨーロッパ以外の地域、たとえば、ナポレオン時代のフランスの状況にかんしては、異なる見解も提示されているとはいえ、ドイツや、なかでもプロイセンにおける学問の世界の変革は、上述の観点から述べるならば、文芸共和国の分断を引き起こした原因であったといえるだろう\*<sup>18</sup>。

もちろん、ベルリン大学の講師職を辞したショーペンハウアー、バーゼル大学の教授の地位を捨てたニーチェの例を見れば分かりますとおり、あらゆる学者が制度化されたシステムに属していたということではない。しかし、ここで重要なのは、制度への参加者の多寡ではない。そうではなく、この参加者たちが、共和的かつ超国家的なモデルの普遍性を破壊したという点をこそ、強調しなければならない。近代国家の形式が十全に整い、アンシャン・レジームが終焉を迎えたとき、学問の新しいシステムが確立された。「知識人の疎外」という表現が、まさしくこの時代に生まれたことは、けっして偶然ではない。

近世にあっても、「学者 (savants)」はしばしば、貧困と社会的差別を味わってきた。たとえば、ユグノー教徒の亡命知識人たちが被る周縁化と貧窮化の度合いは、18 世紀を通じて深まっていった。とはいえ、この時代に前述のような「疎外」が存在したと考えることには無理がある。なぜなら、学者たちの共同体はいまだ、自律性と包摂性によって特徴づけられていたのだから。内包性とは、批判の欠如のことではない。共同体にとって好ましからざる著作は、ただ単純に下級、あるいは不道德なものとして下位に置かれるだけであり、学者たちの住まう空の下から放逐されるなど、考えもよらないことであった。一方で、制度化された新しい体系は、定められた基準に合致しない著作を、自らの領土から追い出すのである。それというのも、文芸共和国にとっては、「外」というものが存在しなかったからである。どのような身分であろうとも、学問に従事するものならば誰でも、否応なしにこの共同体の構成員となった。そして、共同体の裁きに晒されると同時に、ほかのあらゆる構成員にとっての、潜在的な裁判官となるのである。

このように文芸共和国は、いわば知性の自然状態としての姿をまもっていた。しかし、学問の方法が規範ないし法となったとき、学者たち自らの手による制度化された学問の創設は、上述の自然状態からの、知性の脱出を促した。自然状態からの脱出とは、学者同士の個人的・社会的関係が、分断され、露骨に規制を受けるようになったということである。さらには、そうした分断や規制を正式なものと認定する権限は、外部の権威に与えられた。

.....  
\* 18 Lorraine Daston, "Scientific Neutrality and Nationalism under Napoleon." In *Solomon's House Revisited*, edited by T. Friingsmyr. New York 1990, pp.95-119.

かつては、非系統的な支援を公式の義務として君主に課していた生存の協定が、今や、学者たちの共同体にとっての鉄の檻となった。

しかし、もっとも根本的な転換は、学者同士の関係性の形式のうちに生じた。文芸共和国はけっして、一個のユートピアではない。それどころか、共同体はその内部に強い緊張を孕んでいた。けれど、個人同士の関係性は、たとえそれが敵対的なものであったとしても、少なくとも原則においては、学者たちの共同体そのものを良好に維持するために管理・運営されていた。だが、国家の管理のもとにある新しい制度の下では、ナラティブな観点によるならば、主要な目的は国家の利益となり、学問のそれではなくなった。

言い換えれば、文芸共和国の構成員としての学者たちは、自らの生み出した成果である学問から疎外されてしまった。それを取り戻す唯一の方法は、学問を国家にとっての——そしてより時代がくだってからは、市民社会や、あるいは知的公衆が支える特殊なロビー団体にとっての——象徴的・機能的な表現とすることであった。しかし、学問が国家にとっての政治的表現になるということは、いずれの学問が有益であるかについて正式な基準を定める権利が、国家の主権者に所属するというにほかならなかった。

包摂の原理にもとづく文芸共和国は、労働の場ではなかった。新しい構成員を迎え入れるために費用は必要なかったから、その人数は多ければ多いほどよかった。たとえばルイ・ド・ジョクール（Louis de Jaucourt, 1704-1779）のように、百科全書（Encyclopédie）の約 25 パーセントを、無償で執筆した人物もいる。それにたいして近代的制度は、文芸共和国と異なり、時間的にも空間的にも有限であるために、互いに類似した構成員たちによる排他的な形式をとる。かくしてアカデミシヤンの定義は、アカデミズムの世界への参入を熱望する大衆のあいだの、選択の原理と化すのである\*<sup>19</sup>。

自らと立場を同じくする存在（他の知識人もしくは学者たちの共同体）から袂を分かち、別の存在（国家、制度、大学の株主、あるいは、クライアントとしての大学生）へと結合すべしという選択の指針は、19 世紀が今日の知的世界に残した、もっとも深刻な遺産である。

## 6

---

文芸共和国とは、いわば半透明な共同体であった。その内包性のために、国境のような確たる分割線によって区切られておらず、実体性を持たなかったのである。さらに、その

.....  
\* 19 施設の面における学問の革命は、科学史の観点から語ることも可能であろう。科学的探究が、蓄積から分析へと比重を移行させたことは、地球上のあらゆる大陸の探検・航海の達成や、分類学の長足の進歩と符号している。

中心や、そこから生じるはずの階層性もまた、明瞭ではなかった。なぜなら、文芸共和国は自律的な共同体であり、階層制度を法的に規定しうる外部の権力は存在しなかったからである。「知の自然状態」にいる文芸共和国の構成員たちは、共同体の知的指導者たるべく、絶えず互いに競い合っていた。文芸共和国は、構造面でも半透明な性格を備えていた。なぜなら、公けの法律ではなく、メンバーのあいだの個人的な関係に基礎を置く集団だったからである。ようするに、文芸共和国にとって「外」なるものは存在しなかったから、外部の眼差しを設定すること自体が不可能であり、したがって、閉鎖された透明な領域として表象されることもまたありえなかった。

制度化の過程でなされた、科学的に厳密な研究方法の強要は、あくまで部分的なものであった。むしろ、真の変化とは、学者たちの関係性の在り方や、行動の規範にかかわっていた。この関係は、文芸共和国の解消とともに、慣習から法へと変質し、道徳は、職業倫理に取って代わられた。

近年、一見したところ従来の学問制度の代替になるかと思われるような、新たな知的空間が生まれた。すなわち、インターネットにおける知の交換である。インターネットも、内包性と潜在的民主主義を可能にする、半透明な性質を備えている。www.secularcafe.orgのような、知的討論が行われる公的空間は、その一例である。とはいえ、インターネットとは、討論を交わすにあたって個人的な人間関係が前提とされることのない、自立した空間である。それとは異なり、文芸共和国における人間関係は、書簡や雑誌のような媒体によるやり取りの先に、相互的な期待と義務を創出する。言い換えれば、インターネットとは、たんなる受容空間ではなく、その境界が半透明であるにもかかわらず、「リアル」な共同体である。

理想としての文芸共和国は、学者たちにとっての約束の地、学問のエルサレム、プラトノポリスの一つである。しかし、それが現実のものとなる過程において、文芸共和国は、構成員たちの期待に応えることができなかった。自然状態において、知がエデンの園に住まうことはなく、知はむしろ知それ自体にたいし牙を剥くということを、学者たちは悟らざるをえなかった。

そうした状態から脱し、明白で透明な法へと服従して以降、知識人たちはその自律性を失ってしまった。それからというもの、文芸共和国は、アイデンティティを喪失した想像的市民たちにとっての、今は亡き象徴的祖国でありつづけている。

## 'The Republic of Letters' Breaking Up: Institutions and Personal Relationships in the Community of Knowledge

Francesco CAMPAGNOLA

This essay is a tentative reading of the history of early modern intellect as the social history of those who constituted the *République des lettres*. In its original conception, the Republic of letters was the imagined community of scholars whose membership was open to all erudites and savants regardless of nationality, field of activity or fame. This paper focuses on how interpersonal relationships functioned inside such communities and what was socially expected from an aspirant member of the Republic. Through the analysis of intellectual exchanges' modality and ethics, we will show how the *République des lettres* was an autonomous space where intellectuals were determining rules of conduct and scientific standards by and for themselves. Since Erasmus, the Republic's ideal form was thought to be a place where the scholars could find rest and sanctuary from the barbarity of a violent, uncivilized and unkind world that lied outside of its borders. The ideal of a motherland where knowledge was the ultimate end of association and where all citizens were equals — differing only for the merit that the other consociates recognized them — echoed in the words of one of the main heroes of the Republic of letters in its most glorious days, Pierre Bayle.

Il ne s'agit point ici de Religion, il s'agit de Science: on doit donc mettre bas tous les termes qui divisent les hommes en différentes factions, & considérer seulement le point dans lequel il se réunissent, qui est la qualité d'Homme illustré dans la République des Lettres. En ce sens-là tous les Sçavans se doivent regarder comme frères, ou comme d'aussi bonne maison les uns que les autres

All possible causes of division and partisanship had to be left aside in order to foster that *augmentis scientiarum* which, since Francis Bacon, had been the primary goal of scholarly association. From a structural point of view, this meant that the *République des lettres* had to be an inclusive and open space. New members were actively and continuously sought for.

Finally, the Republic was based on a network of personal relationships and the institutional aspect was secondary in a reality in which private and public sphere were not clearly divided. Such ambiguity, together with the potentially unlimited inclusivity, made of the Republic of letters a diaphanous reality, whose centre and borders were not clearly definable. The entire hierarchy and structure of the relationships that constituted it appeared somehow murky while a lack of an external authority capable of determining absolute positions and values caused an ongoing struggle for primacy among different factions.

As the actual Republic of letters fell short from the expectations of the scholars when compared with the utopic ideal of a peaceful and impartial *Respublica litteraria*, new models of social aggregation among scholars emerged. Thus, the second part of the essay explores how the world of knowledge became institutional and part of a public sphere as defined by the culture of the new modern nation states. In such process, the international unity of the *République des lettres* disintegrated and new forms of relationship between scholars — externally determined by the state authority — were created.